

5) 妊娠中毒症と HLA 抗原系—PCR—RFLP 法を用いた遺伝子解析

高桑 好一・今井 勤 (新潟大学)
 荒川 正人・田中 憲一 (産婦人科)
 本多 啓輔 (小千谷総合病院)
 産婦人科
 幡谷 功 (長岡中央総合病院)
 産婦人科

妊娠中毒症の原因はまだまだ不明であるが、免疫学的・遺伝学的原因の関与が推察されている。一方、免疫学的・遺伝学的背景を有する疾患ではヒト主要組織適合抗原系である HLA 抗原系と疾患との関連性が検討されている。われわれはすでに妊娠中毒症と HLA クラス I (HLA-A, -B, -C) 抗原との関連性を検討し、報告している。今回、血清学的に判定が困難なクラス II 抗原につき PCR-RFLP (Polymerase chain reaction-restricted fragment length polymorphism) 法を用い、遺伝子型を判定し、疾患感受性、疾患抵抗性について検討した。重症妊娠中毒症症例43例、対照群50例について末梢血リンパ球から DNA を分離、PCR 法により多型性を有する領域を増幅し、制限酵素を用いて切断、その切断パターンにより、HLA 遺伝子型を判別した。その結果 HLA-DPB1 遺伝子型について、妊娠中毒症について疾患感受性を示す型が認められた。

6) 当院における過去10年間の産科統計

花岡 仁一・関根 正幸 (新潟市民病院)
 青野 一則・東條 義弥 (産婦人科)
 竹内 裕・徳永 昭輝

新潟市民病院では1987年に新生児医療センターが開設されて以来満10年が経過した。そこで、この間の主な産科統計について、全国的な動向をふまえながら報告する。

全国的な出生率の低下、妊婦の高齢化、多胎の増加、早産の増加は、当科の統計でもこれらの点が反映されており、近年では、分娩数約850件(減少)、高年初産3.5%(増加)、多胎3.8%(増加)、早産17.4%(増加)であった。

母体搬送は年々増加し、近年では分娩数の17.7%を占めた。

これらハイリスク妊娠の増加により帝切率は増加しており、近年では28.6%であった。

7) 染色体異常を伴った胎児水腫の一例

石田 道雄・上田 宏之 (上越総合病院)
 産婦人科
 関口 次郎 (新潟大学)
 産婦人科
 関塚 直人・荒川 正人 (産科婦人科学教室)
 田中 憲一

胎児水腫を契機に、夫の14・21番ロバートソン型転座が発見された夫婦の診療を経験した。この夫婦に流産歴はない。しかし、初回妊娠は、18週で胎児水腫が発見され、結局人工流産に終わった。児は女性で、剖検せず染色体検査のみ提出した。その結果、14・21番ロバートソン型転座および3本のX染色体という2種類の異常を合わせ持つことが判明した。間もなく2回目の妊娠が成立し、夫婦は胎児および自らの染色体検査を希望するに至った。その結果、妻は正常核型、夫と胎児は14・21番ロバートソン型転座(均衡型)を有することが判明した。妊娠は継続され、41週で3468グラムの健康女児が出生した。

ここに診療は一担終了したが、数々の疑問が残った。主なものは、初回の染色体異常と胎児水腫との関連の有無、および、過剰なX染色体の由来という2点である。立証はもはや困難であろうが、トリプルXと胎児水腫が関連し得る可能性は指摘できると考える。

8) 切迫早産症例に対する羊水穿刺に関する考察

夏目 学浩・今井 勤
 渋谷 伸一・松下 宏
 本多 晃・荒川 正人
 山本 泰明・関塚 直人
 長谷川 功・高桑 好一 (新潟大学)
 産婦人科
 田中 憲一
 須藤 正二・許 重治 (同 小児科)
 内山 聖

子宮内感染の正確な評価は切迫早産、前期破水の管理に重要である。子宮内感染診断目的に羊水穿刺施行した妊娠23~32週の切迫早産、前期破水24例を対象に、羊水検査と母体血液検査の結果、穿刺後妊娠経過、CAMや胎児感染の有無を比較検討し、羊水穿刺の意義を評価した。羊水中グルコース濃度(<20mg/dl)、細胞数(>100/m³)、白血球エステラーゼ(>2+)、何れか1つ以上陽性の場合に子宮内感染とした。

感染の判定で児を娩出した7例(CAM5例、うち胎児感染4例)、感染が否定され妊娠継続した4例は羊水穿刺の意義を認め、母体血液検査、羊水検査共に感染徴候なく追加情報のない4例、穿刺直後に分娩に至った6例は意義を認めず、3例は他の要因で分娩となり判定不能だった。

羊水中グルコース濃度，細胞数，白血球エステラーゼの所見はCAM，胎児感染の診断に有用と考えられ，グルコース濃度は敏感度，特異度とも90%以上だった。

9) 出生前診断で嚢胞を指摘された胆道閉鎖症の1例

飯沼 泰史・岩淵 眞
内山 昌則・内藤万砂文 (新潟大学)
八木 実 (小児外科)
本多 晃・関塚 直人
高桑 好一・田中 憲一 (同産婦人科)
松永 雅道・許 重治
内山 聖 (同小児科)

症例は46生日の男児。胎生24週より肝下面に直径2cmの嚢胞を指摘され，37週2812gで出生した。総胆管の拡張を認め，生後2週間は黄色便であったことから，先天性胆道拡張症として経過観察された。しかし37日より灰白色便が出現し，胆道閉鎖症の疑いで，58生日に開腹手術を施行された。手術所見では総胆管の嚢腫状拡張と肝門部微小肝管開存，肝内胆管の雲母状変化を伴うI型胆道閉鎖症であった。肝門部空腸吻合部再狭窄のため，再手術を140病日に再手術を施行したが，以後順調に経過し黄疸は消失した。

10) 出生前診断された泌尿器疾患の治療方針

山際 岩雄・小幡 和也
斎藤 浩幸・大内 孝幸 (山形大学)
島崎 靖久 (第二外科)

1987年から1997年までの11年間に当科で扱った出生前診断症例は64例で，腎尿路疾患は29例45%を占めた。腎盂尿管移行部閉塞による水腎症16例，多嚢性異形成腎7例，原発性閉塞性巨大尿管2例，両側膀胱憩室1例，膀胱尿管逆流2例であった。腎盂尿管移行部閉塞による水腎症は4度以上の水腎で利尿レノグラムでラシックスに反応のない12例を手術適応とし，いずれも腎瘻をおかず一期的にAnderson-Hynes腎盂形成を行った。手術日令は5から232日(中央値58日)だった。多嚢性異形成腎はいずれも経過観察したが，2才過ぎても縮小しない3例で切除した。原発性閉塞性巨大尿管は1例は生後26日に一期的に，1例は腎瘻造設後，生後45日に，尿管膀胱吻合を行った。VURの1例は生後3か月で逆流防止術を行い，1例は経過観察した。両側膀胱憩室は生後10か月で，憩室切除，尿管膀胱吻合術を行った。全

例腎機能は保たれ良好に経過している。

11) 右横隔膜ヘルニアの1例(出生前診断例)

大沢 義弘・近藤 公男 (太田西ノ内病院)
鈴木 律子 (小児外科)
増谷 聡・池上 博彦 (同小児科)

'95年以降当科で経験した先天性横隔膜ヘルニア症例は8例で，いずれも生直後発症例であり，待機手術にて対応してきた(内死亡2例)。

このうち最近経験した症例は，出生前診断された右横隔膜発症例で，肝右葉も横膈内(左側にまで及ぶ)に陥入した横隔膜全欠損の重症型であった。これに対し，生後4日目に開胸腹手術にてパッチ(ゴアテックス)を用いて閉鎖した。

術後8病日頃までは比較的順調に経過したが，同10病日肺高血圧(PPHN)の再増悪をきたし呼吸循環不全にて死亡した。

II. 特別講演

「胎児医療の最近の進歩」

名古屋市立大学産科婦人科学教室教授

鈴木 薫 先生

第40回新潟造血管腫瘍研究会

日時 平成11年3月26日(金)
会場 有任記念館

一般演題

1) EPOCH療法が奏功した高悪性度悪性リンパ腫の一例

今井 洋介・張 高明 (県立がんセンター)
新潟病院内科
有本 直樹・小松原秀一 (同泌尿器科)
本間 慶一・根本 啓一 (同病理科)

症例は84歳，女性。膀胱内腫瘍にて尿閉状態となり，当院泌尿器科へ紹介入院。末梢血中に異型リンパ細胞を